

ライティングの授業における プロセス・ライティングの取り組み — アクション・リサーチ —

鈴木 栄^{*1}

Implementation on Process Writing in Writing Class
Action Research

Sakae SUZUKI

This paper explores the incorporation of peer feedback in process-oriented English writing instruction. Participants were forty-one students at Oyama National College of Technology. Data include the pre-questionnaire and post-questionnaire with students' reflection. Results implicate that peer feedback was beneficial for students to assist them in becoming good writers of English.

KEYWORDS : process writing, peer review, action research

1. はじめに

アンケート結果によると、学生の要望では、伸ばしたい英語能力が、リスニング、スピーキングが高く、リーディング、ライティングは低い傾向にある(岡田、2005)¹⁾。海外とのコミュニケーション手段が、インターネットの普及に伴い、英語を書いて伝えることの必要性も高まって来ていることを考えると、英語を書くことに慣れ、まとまった英文を書く力をつけることが必要である。

英文を書く力を伸ばすために行われている方法に、プロセス・ライティングがある。英語を書きながら、書くプロセスにおいてフィードバックを得ながら、英文を書くことに慣れると同時に正しく書く力を身につける方法である。本稿では、英語を書く過程において、各学習者の、ライティングに関する考え方が変わるかを調べた。

ライティングを伸ばすためには、outcome が多いこと、つまり書く量が多いことが望まれる。高専生の様子を見ていると、授業以外で英語の学習をする学生は少ない。自由に英語を書くことはほとんど無いと予測される。授業の中で、書く機会を与えることで、学生が、英文を書くことに興味を持ち、楽しいと感じてもらえれば、それが、今後の英語学習への動機づけになると考えた。

JABEE の評価規準の中に、チームワークの向上が新しく加わった。このことを踏まえ、授業の中でも、協同作業をする、考えを分かち合う、といった経験が学習の過程に含まれることが望まれる。これは、佐野(2005)²⁾ が述べている内容と一致すると思われる。「最近の生徒は仲間づくりが苦手な子が多いので、教師が中心になって、コミュニケーションを図る活動を計画しなければなりません」。プロセス・ライティングのフィード

*1 一般科(Department of General Education), E-mail: sakaes@oyama-ct.ac.jp

バック (peer / instructor) は効果があると想定し、本研究をおこなった。

1. 1. ライティングの授業

ライティングの授業は、ライティングA (前期) B (後期) に分かれ、文法演習を中心とした教科書ですすめられている。文法事項を消化することに終始する授業では、学生が、自分で英文を作りあげる経験をもつことがほとんどできない。文献研究からライティングの指導法として3つが注目される。まず、プロセス・ライティング (process writing) である。英文を書くプロセスを書き直しまでおこない経験する方法である。アイデアを出すためのブレイン・ストーミング (brainstorming)、草稿書き (drafting)、編集 (editing) を教師、クラスメートからのフィードバックによりおこない、改訂 (revising) をしていくものである。2番目には、自分自信の意見や経験を自由に書かせるフリー・ライティング (free writing) である。この方法は、文法や語彙、文章構成などで細かい指導ができていくという欠点がある。その欠点を補う方法として、グラマー・シンタックス・オーガニゼーション・ライティング (grammar-syntax-organization approach) がある。この方法は、文法・文章構造・パラグラフを同時に指導する方法で、文構造や文法を学んだ後に、学習した項目を用いて書く目的を与え、書かせる方法である。

英語が苦手であるという意識が多く、授業外での英語の学習をほとんどしない高専生の実態を見ると、フリー・ライティングは効果が無いと思われる。また、文法項目に沿って構成されているライティングAの教科書の内容を考えると、文法を学びながら、学んだ文法を使い、英文を書かせる機会を増やすことがいいのではないかと考えた。そして、JABEEの目標でもある、チームワークを重視した活動を考慮に入れ、フィードバックを使うプロセス・ライティングが相応しいと考えた。

2. アクション・リサーチについて

アクション・リサーチ (Action Research) は、授業改善を目的とした、reflective teaching を目標とした実践研究である。つまり、理論や経験からヒントを得て授業実践をしながら、実践の経過・結果を客観的な視点で考察し、得られた知見を次の実践に移すアプローチのことである (佐野、20

07)³⁾。アクション・リサーチが従来のリサーチにはあてはまらないという批判があるが、それは、科学論文に必要な信頼性・妥当性に欠ける部分があるからと言われている。①内的信頼性 (internal reliability)、②外的信頼性 (external reliability)、③内的妥当性 (internal validity)、④外的妥当性 (external validity) において、特に④の外的妥当性、つまり、一般論としての妥当性が欠けているという指摘がある。しかし、アクション・リサーチの本来の目的は、教師と学習者が直面している問題解決、あるいは、教授法の改善を目的とするため、その対象が異なる場合には、一般性が出にくい。教師や学生が異なる場合に、同じような結果を得ることができるかはわからないからである。しかし、1つひとつのアクション・リサーチを、ケーススタディー (case study) のように捉えれば、そこに、ある種の一般性が生まれるのではないかと考える。教育の現場では、多くのケーススタディーがなされることで、状況を分析し、よりよい授業を組み立てる糸口が見つかると考えられる。そうした意味でのアクション・リサーチの意義は大きい。

アクション・リサーチのステップは、Nunan (1993)⁴⁾によると6段階に分けられる。①問題の確定 (problem identification) ②予備的調査 (preliminary investigation) ③仮設の設定 (hypothesis) ④計画の実践 (plan intervention) ⑤結果の検証 (Outcome) ⑥報告 (Reporting)。これらのステップは絶対的なものではなく、実際の研究現場によってはステップが重なることもあると予測される。基本的な reflective teaching がおこなわれている限り、アクション・リサーチの効果は期待される。

3. プロセス・ライティングの文献

隅田 (2010)⁵⁾ は、短大におけるプロセス・ライティング指導法において、教師やクラスメートからのフィードバック、自己フィードバックが必要であり、フィードバックを基に、自分のドラフトを書き直し、文章自体の質が向上することはよく知られているが、自分が気付かなかった技術上・内容上の問題点や、文法などの問題点に気付き自分の作文を見直す機会が得られる、としている。学生は、フィードバックに対して、特にクラスメートからのフィードバックに対してポジティブな

考え方を持っていることがわかった。ただし、自分の作文の内容を多くのクラスメートに知られることに若干抵抗があるというアンケート結果も出ていることから、岡田は、読み手を意識し、その存在を好意的に捉えるためには、匿名性を確保したフィードバックが大きな意義をもつ、としている。

岡田(2005)は、書き直しが学習者のライティング力を向上させる重要な方略である(Cowie,1995)⁶⁾を引用し、そのために教師やクラスメートからのフィードバックも有効である、としながらも、日本人英語学習者の場合には、学力的、社会的な要因を考慮すると同時に、学習者同士のフィードバックを効果的におこなうための方法を模索していくことが不可欠であるとしている。岡田は、アンケート調査の結果、学習者同士のフィードバックは、フィードバックを受容することに対しては肯定的であるが、フィードバックを与える立場になると学習者の英語レベルが大きく影響し、フィードバックが効果的におこなわれない場合があることがわかり、フィードバックの方法を指示することも必要であるとしている。これらの文献による指摘を考慮し、今回の研究では、学生に英文添削コード(資料1)を与えることにした。

さらにモチベーション研究のUshioda(2012)⁷⁾の主張、「speakers' themselves」が必要である。つまり、問題に答える、練習問題をおこなう、という訓練だけでは、学習者は、自分を出す機会が無い。講義を聴き、メモをする知識を与えるだけの授業では、学習者が自分になる機会が生まれず、internal motivation(内発的モチベーション)は上がらない。授業の中で、できるだけ、自分を出す機会を与えることが重要である。」を踏まえ、自分のことに関することを書くことでモチベーションがあがると考え、日本語から英語への翻訳だけではなく、自由作文も入れることにした。

4. 研究方法

プロセス・ライティングは、エッセイを書く時などに有効であるとするが、ライティングAの学生のレベルと、科目のシラバスから(前期のみである)エッセイを書く時間的な余裕があまり無いことを考慮し、プロセス・ライティングの peer editing(学習者同士のフィードバック・添削)の部分のみを試験的に実施することにした。

4. 1. 対象

2012年にライティング2A(前期)を履修している小山高校2年電子情報工学科の学生41名。

4. 2. ステップ

- ①問題確定のための予備調査として、4月にアンケートを取る。
- ②仮説の設定
- ③授業・調査の実践
- ④結果の検証として、9月にアンケートを取る。

5. 事前調査結果

5. 1 アンケート結果(2012年4月)

(1) 授業以外での英語の学習

①肯定 22人 ②否定 19人
肯定:英検3級の勉強・復習・予習・自主学习(音読・単語練習)・英会話・塾・学校のノートを別のノートに写す・本文の和訳・英語のCDを聞く・Student Timesを読む・単語を書き出す
否定:時間が無い・勉強方法がわからない・理数の勉強だけで時間が埋まってしまう・部活・バイト・英語が好きでない・面倒くさい

2010年の上級生へのアンケート調査では、220人中174人の学生が、同じ質問に対し、していない、と回答した(79%)。今回は、していない、と回答した学生は、46%である。学科によって結果は異なるであろうが、2年生の段階では、授業外課題にも取り組む姿勢があるとわかった。

(2) 海外経験

①はい 3人 ②いいえ 39人
高専生は、上級生になっても海外経験がほとんど無く、海外の情報や、言語体験を肌で感じた経験が無い。このことは、外国語学習、特に、リスニング、スピーキングへのモチベーションがあがらないことへの間接的な原因とも考えられる。

(3) 英語を勉強することに関する学習観

英語学習について、「英語を勉強することは〜のような」を問いと、学生からメタファーを集めた。その結果は次のようになった。

意味不明が文字の羅列を解釈していくこと・海外旅行に行く人（海外旅行以外で使う気がない）・絡んだひもをほどいている（発音・文法に例外が多すぎる）・未知なる宇宙にロケットはっしゃ（なんかっこいいし、未知の世界だけど頭がよくなれた気がする）・他国との文化交流（世界中で使われている言語だから）・地獄（英語を勉強するのが辛い）・古文の勉強（勉強しないでも意味がわかる時があるし、何を言っているのかぜんぜんわからないときもある）・漢文の学習（主語、述語の並びが日本語と違う）・暗闇を進む（右も左もわからないものをひもといていくという共通点）・モンスターハンター（めんどいけど、たまにやる気がでる）・国語の勉強・女の子と一緒にいること（苦もあり楽もある）・走っているとき（つらいように感じる）・なぞ（よくわからない）・つな渡り（不安が多い）・強いられている（英語が嫌い）・大切だと言われている（僕はあまりやりたくない）・必要なこと（外国人と接する機会が増えるから）・夢（英語ができるようになることで世界が広がる）・人をだますために訓練すること（日本で英語ができる人＝できる人というイメージがあるから）・長い距離を走る（覚えることが多かったりするから）・ひまつぶし（時間が空いているときにしているから）・心理学を学ぶ上で重要なこと（心理学に興味がある）・あたりまえ（英語のものが多くなった）・日本でTGVを運行すること（日本の企画（言語）ではなく海外の企画を国内で施行することに比喻される）・インフルエンザ（ただ苦しいだけ）・きざんでいるたまねぎ（あれ、自然と涙が）・異文化を勉強する（言葉にはその国の歴史がある）・じゃんけん大会で準優勝したとき（おもしろくはないから）・忍耐・それ即ち世界を制す（世界の共通語だから）・ドアを開けること（当たり前のこと）・異界の言語を学ぶこと・何かを我慢している（英作文が苦手だから）・真っ暗なトンネルに明かりを灯す作業（1つひとつ覚えていかなければわからなくなり、振り返ることで習ったことを思い出せるので）・文法の見直し（国語の文法と似ているところがあるので、確認しながらできるから）

記入をした29の回答の中で、ネガティブと考えられる回答は、地獄など、5回答で、難しさへの不安に関する回答や、英語の意義を回答したものもあった。多様な英語学習を経験することで、

考えが変わる可能性もあるであろう。

(4) ライティングの授業に関する知識

自分の体験や感想を英語にする・文法を沢山書く（9）日本語から英語に訳す（5）・書く学習（22）・英文を正しく書けるような学習・何度も書いて覚える（3）英語をたくさん書く・英語を使って自分を表現する方法

(5) 英語に関する質問（選択肢）

質問に対する回答は、次のようになった。

①文法的に正しい文を書く必要がある。

同意する					同意しない				
5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
3	17	9	11	1					

コミュニケーションの道具として英語を使う場合、伝えたい内容が相手に伝わることが重要である。そのためには、文法的に正しい文を書く必要があるか、という問いには、およそ半分の学生が同意をしている。

②N S (Native Speaker)は文法の間違いをしない。

同意する					同意しない				
5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
0	4	14	16	6					

のN S 信仰（N S の英語が正しい）というstereotype（固定観念）があると予想をしていたが、結果は逆であった。

③間違いをすることが怖い。

同意する					同意しない				
5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
10	14	11	3	2					

間違いに対する不安はかなり強いことがわかる。これは、特にアジアの学習者に顕著である（Murphey,1996）⁸⁾。そして、それが学習者のoutcomeを減らし、結果的には、英語の力の伸長を妨げていることが多い。間違いは、学ぶための踏み石であると考えられるような活動を授業でおこなうことが望まれる。また、間違いを探し、指摘するだけの授業ではなく、学生の不安を取り除くような授業環境を作ることも重要である。

④日本語では間違わない。

同意する		同意しない		
5	4	3	2	1
0	8	13	12	8

⑤英語を書くことに自信がある。

同意する		同意しない		
5	4	3	2	1
0	1	6	20	14

間違いに対する不安があるため、自分の書いた英文を他人（クラスメート）に読んでもらうことに抵抗がある、という結果になっている。

⑥聞いたり、話すより書くことが重要である。

同意する		同意しない		
5	4	3	2	1
1	10	12	15	3

⑦書く機会が増えれば力が伸びる。

同意する		同意しない		
5	4	3	2	1
10	26	4	2	0

⑧自分の意見や考えを書くのは楽しい。

同意する		同意しない		
5	4	3	2	1
2	4	14	15	5

⑦では、書く機会があれば、力が伸びると考えている学生が多いが、⑧の書く喜びを感じている学生は、少ない。そして、その結果、⑤英語に対する自信が、無い、ということになっているようである。

⑨英単語がわかれば英語が書ける。

同意する		同意しない		
5	4	3	2	1
5	15	9	12	0

⑩先生に直してもらうのが一番いい。

同意する		同意しない		
5	4	3	2	1
3	33	10	0	0

⑪クラスメートに直してもらうのは効果が無い。

同意する		同意しない		
5	4	3	2	1
0	0	15	20	6

⑫クラスメートに読んでもらうのは嬉しい。

同意する		同意しない		
5	4	3	2	1
1	0	16	17	7

⑬クラスメートのフィードバックは参考になる。

同意する		同意しない		
5	4	3	2	1
2	21	15	3	0

(6) この授業で期待すること

英作文が正しく書けること 7

英語力の向上 1 0

国際人 1

単位の獲得 3

赤点回避 1

よい評価を得る 1

わかりやすい授業 1

TOEIC 高得点 1

大半の学生は、英語ができるようになりたい、英語を正確に書けるようになりたいと考えていることがわかった。英語を書くこつ、ストラテジーなどを教えること、多くの英文を書くことで、学生は、書くことに慣れ、より正確な英文が書けるようになると期待される。

5. 2 アンケートから見えた学生像

mistakes に関しては、日本人の学生が多く持っている myths (Murphey, 1996)、文法的に正確な英文を書くことが必要、NS信仰、自己の母語信仰は、少なく、間違いに対する恐怖は、Murphey の研究結果と一致した。

writing に関しては、日本人学生が多くもつ、speaking 最重要性は少なく、書くことに自信は無いが、多く書くことで力がつくと考えている傾向にある。ただし、多く書くことに慣れてはいないため、自分の考えや意見を英語で書くことに対す

る興味・喜びは感じる事が少ない。writing に対しても、語彙力の不足をあげている。これは、自身の英語力評価である。

editing に関しては、教師信仰が強いが、クラスメートからのフィードバック、コレクションに関してはネガティブでは無い。ただし、自分の書いた英文に対する自信が無いため、クラスメートに読んでもらうことに関しては抵抗がある。

6. 仮説の設定

- ①自由に書く機会を増やせば、英語を書く力は伸びるであろう。
- ②多く書くことで、書くことに慣れ、面白くなってきて、自信がつくだろう。(苦手意識の克服)
- ③お互いの英語のチェックをし、内容を読むことで、間違いへの気づきが生まれ、さらに、学習者間の理解が深まるだろう。

7. 授業・調査の実践

授業(ライティングA)の一環として導入したライティング活動は、以下の手順でおこなわれた。

- ①授業では、テキスト(Daily English Writing 池田書店)の内容理解のための演習問題をおこない、文法事項の理解を徹底させた。文法事項の丸暗記ではなく、文法のルールを発見するアクティビティーをおこなった。扱った文法項目は、(1)文の基本パターン、(2)現在形・過去形、(3)未来形、進行形、(4)完了形、(5)受け身、である。時制に関しては、特に、tense aspect(時制に関する感覚)に焦点をあてた問題をおこなった。
- ②前期の授業5回の中で、ライティングの課題を3つ出し(宿題)、ペアにしてフィードバックを、英文添削コードにしたがっておこない、それを基に書き直して提出させた。提出した作文は、10段階で評価をし、添削をしてから返却した。ライティング(作文)のテーマは、以下である。

学習した文法事項を入れた英文を書く。

- 1 Learning History(現在形・過去形)
これまでの英語学習の歴史を振り返る内容を書く。
- 2 旅行記(完了形)
印象に残った旅行について、例として与えた旅行記のフォームに添って書く。

3 詩(時制)

与えられた詩のフォームに言葉を入れることで独創的な詩を書く。

評価規準は、以下のようにした。

- (1) アイデア(独創性・創造性・content)
- (2) 英語(文法・構文・accuracy・complexity)
- (3) 完成度(総合的なまとまり・fluency)

評価A(10・9) Very Good

- (1) 伝える内容・情報が豊かである。
- (2) 英語の語彙・構成・文法などがほぼ正確である。
- (3) 英文の量は情報を伝えるには充分満足いく量である。作品としての工夫や完成度が高い。

評価B(8・7) Good

- (1) 伝える内容・情報がだいたい満足できる。
- (2) 英語の語彙・構成・文法に多少間違いがあるが、理解できる。
- (3) 英文の量は情報を伝えるための最小限の量である。作品として完成している。

評価C(6・5) Pass

- (1) 伝える内容・情報が不十分である。
- (2) 英語の語彙・構文・文法に間違いが目立ち、不十分である。
- (3) 英文の量が少ない。作品として未完成の部分が目立つ。

評価C以下は、評価の対象とせず、再提出・再評価とした。

8. 考察

ここでは、3つの仮説に対する考察について述べる。

仮説①自由に書く機会を増やせば、英語を書く力は伸びるであろう。

課題の提出状況は、第1回から3回まで全員提出した。評価の平均値は以下のようになった。

1回	2回	3回
7.4 A 4人	7.0 A 4人	7.4 A 10人

課題の内容が異なるため、正確な結果では無いが、平均値は、3回ともほぼ同じである。評価10を取った学生が3回目の課題(詩)が多かったこと

は、詩を書くという創造的な活動を得意とする学生がいることが暗示される。課題1・2では、アイデアよりも、事実に基づき文章を構成することが要求されるため、Aの評価を取る学生が少数であった、と考えられる。学生の書くことへの苦手意識を少なくするためには、詩のような、形式にあまりこだわらず。アイデアを出し英文を書くという活動に効果があるのかもしれない。

仮説②多く書くことで、書くことに慣れ、面白くなってきて、自信がつくだろう。(苦手意識の克服)

このことに関して4月のアンケートの結果と9月のアンケートの結果は以下である。

③間違いをすることが怖い。

	5	4	3	2	1
同意する					同意しない
4月	10	14	13	3	2
9月	4	17	9	7	2

⑤英語を書くことに自信がある。

	5	4	3	2	1
同意する					同意しない
4月	0	1	6	20	14
9月	0	0	8	11	20

⑧自分の意見や考えを書くのは楽しい。

	5	4	3	2	1
同意する					同意しない
4月	2	4	14	15	5
9月	2	6	19	8	4

間違いに対する恐怖は、わずかであるが減少している。英語を書くことに対する自信は、自信が無いと回答した学生が、わずかであるが、減少している。英語で自分の意見などを書くことが楽しい、と感じる学生は、わずかであるが増加している。前期のみの授業であったため、調査期間が短く、書く回数も限られていたため、大きな効果は出ていないが、実際に英文を書く課題を増やすことに関しては、効果が期待できると考えられる。仮説①②に関する、学生の記述回答は以下である。

アンケート結果(2012年9月)

1 英語のエッセイを書いたことで英語学習に

効果がありましたか?あった場合、どのような点で効果がありましたか。(記述のまま)

- ・普段使わない単語などを調べることで、知識が増えた。
- ・長い英文を書くことが苦でなくなった。
- ・文の構成について理解を深められた。
- ・自分は、中学レベルの英語しか書けなかったもので、それほど効果はなかった。
- ・書く力が上がった。
- ・考えていることを英文に変換する、通常の会話の勉強になった。
- ・自分の意見を伝えることができたのでよかった。自分の意見を伝えないと外国に行ってもだめになるのでよかったと思う。
- ・文法のかくにんができる。単語を学べる。
- ・実感できない。
- ・わからなさすぎて、なかなか焦りました。
- ・なし。
- ・文章を考えて書く力がついた気がする。
- ・英作に必要な文法を理解することができた。
- ・自分の作文スキルのなさに気づいた。
- ・英作文を書く力がついたと思う。やらないとどんどん落ちていくと思う。
- ・様々な文法を用いて自分の書きたいことを表現できるようになった。
- ・英作文力が少し上がった。
- ・自分で書いた文のどこかが間違っているのがわかった。
- ・若干効果があったと思う。英文を書くという経験が増えた。
- ・英語力がアップした。
- ・Yeah!! Enjoyed!!
- ・自分が使える文法を工夫してつかうことができた。
- ・どういうくせで書くかがわかった。
- ・中学の時から英作文をやっていたので新たな効果はなかったと思います。

実際に英文を書く、という作業が、学生の意識変化に影響をしていることがわかる。自分の英語力に関する内省(単語力の無さ、自分のくせ)、英語学習の学習方略に関する気づき(学習した文法を使い英文を書くことで英語に慣れることができる、英文を多く書く必要性)が見られる。一方、あまり効果を感じることができなかった学生の感想(中学生レベルの英語しか書けなかったもので、

それほど効果はなかった)に代表される、達成感を感じることができなかった学生への対処法を今後考える必要があるであろう。

仮説③お互いの英語のチェックをし、内容を読むことで、間違いへの気づきが生まれ、さらに、学習者間の理解が深まるだろう。

Peer editing に関する4月のアンケートの結果と9月のアンケートの結果は以下である。

⑪クラスメートに直してもらうのは効果が無い。

同意する 同意しない

	5	4	3	2	1
4月	0	0	15	20	6
9月	0	2	17	16	4

⑩先生に直してもらうのが一番いい。

同意する 同意しない

	5	4	3	2	1
4月	3	33	10	0	0
9月	5	14	20	0	0

⑫クラスメートに読んでもらうのは嬉しい。

同意する 同意しない

	5	4	3	2	1
4月	1	0	16	17	7
9月	0	2	13	15	9

⑬クラスメートのフィードバックは参考になる。

同意する 同意しない

	5	4	3	2	1
4月	2	21	15	3	0
9月	4	11	21	2	1

Peer editing に関しては、どちらかと言うと効果があると考える学生が多いが、9月の結果では、否定的な学生が2名になっている。これは、実際におこない、学生の習熟度の差などにより、効果を感じることができなかった学生がいたためであろう。教員が直すことが一番いいと考える学生は、わずかであるが減少しているのは、クラスメートが添削したことで、間違いに気づき、訂正をすることができ、教員からでなく同級生からのフィードバックも役にたつと感じることができたためであろう。クラスメートに自分の英文を読んでもらうことについては、記述回答にあるように、よかったと考える学生と恥ずかしさを感じる学生もいたことがわかる。

学生の記述回答から、peer editing に関する課題も見えてきた。間違いがわかったことや、参考になったという感想もあるが、同時に、不安感(クラスメートの添削があっているか)や、恥ずかしいという反応もあった。クラスメートが直した英文が正しいかという確認のプロセス、無記名にして添削をおこなうことで、筆者を特定できないようにする、などの配慮が必要であろう。

アンケート結果(2012年9月)

Peer editing に関するアンケートの記述回答は以下である。(記述のまま)

2 英文添削をクラスメートにしてもらった感想を書いてください。

- ・とても参考になり、次のものに活かせることができると思った。
- ・これはしたことがなかったので新鮮でした。
- ・少しは恥ずかしかった。
- ・たのしかった。
- ・間違いが減った。
- ・クラスメートだとあっているのかという判断がよくわからない。
- ・自分の間違っているところがわかった。
- ・自分の文はとても間違いが多かった。
- ・同程度の実力の人から指摘されるからショックが大きい。
- ・参考になった。
- ・わかりやすいときもある。
- ・自分もミスがあったけど添削もミスがあった。
- ・人の作文を見れてよかった。
- ・英単語を自分がいかに知らないかを教えられた。
- ・わかりやすく教えてもらってよかった。
- ・あまり大きな効果を感じなかった。
- ・お互いが見ることによって力も上がると思う。
- ・クラスメートも間違っていることがある。
- ・自分の知らなかったことを教えてもらったりしたので新しいことを覚えられた。
- ・いろいろ大変だった。
- ・自分で見つけられないまちがいがみつかった。
- ・嬉しくはない。
- ・なんか不安だった。
- ・自分の英文を客観的に見てもらって、間違いを指摘してくれたのでとても勉強になった。

9. まとめ

本調査では、プロセス・ライティングの *peer editing* に焦点を当て、ライティングの授業で、作文を3回課題として与えた結果をまとめた。岡田の研究結果でも、フィードバックを与える立場になると学習者の英語レベルが大きく影響し、フィードバックが効果的におこなわれない場合がある、としているが、本調査においても、同様の結果が得られた。今回は、*peer editing* は、隣に座っている学生との交換、という形にしたが、今後は、複数の学生によって *peer editing* をおこなうことで、その効果を高めることを期待したい。

また、フィードバック方法について学生に周知させる時間も必要であるとわかった。時間を取り、フィードバックの方法についてのガイダンスや、練習をおこなうことで、学生のフィードバックへの意識を高め、より効果的なフィードバックができるようになると考えられる。学生が、記述回答に書いているように、「新鮮であった」「参考になった」という感想があり、こうした試みは、学習者が、学習のプロセスとして新しい方法を体験した、という意味では意義があったと感じている。今回の調査は、期間が短く、ランティングの能力の向上に繋がったかということについては断定することはできない。しかしながら、教科書の問題を解くだけではなく、自由に英文を書く機会を与えたことで、学習者が、お互いのことを知り、教師も学習者についての知識が増え、学習者の可能性についても把握ができた、という点では、有意義な試みであった。今後も、学生が、学んだ英語の知識を実際に使うことで、英語を書くこと、伝えることに関心と興味を持つことができるように、様々な取り組みをしていきたい。

資料1 英文添削コード

英文添削について

英文を添削する時に、以下の各項目にしたがって直していきましょう。添削には、技術的添削と内容的添削があります。前者は、文法やスペルのミスなどをチェックすること、後者は、文の構造の疑問、メッセージが明確に伝えられているか、などをチェックすることです。添削した場所に、コード番号を書きましょう。最後に、チェックしたコードの回数を記入しましょう。

英文添削コード

<第一段階添削：技術的添削>

- ①スペルは正しいですか。
 - ②主語と動詞は一致していますか。
 - ③動詞の時制（現在・過去・未来・完了）形の使い方は正しいですか。
 - ④準動詞（不定詞・分詞・動名詞）の使い方は正しいですか。
 - ⑤語の順番は正しいですか。
 - ⑥大文字は正しく使われていますか。
 - ⑦小文字は正しく使われていますか。
- ##### <第二段階添削：内容的添削>
- ⑧段落のまとめ方は適切ですか。
 - ⑨タイトルと内容が一致していますか。
 - ⑩伝えたい内容が明確ですか（何を言いたいのかわかりますか）。
 - ⑪分量は適切ですか。

英文添削コード表

第1回（月 日）英文番号（ ）

--

資料2

学生の作品（詩）評価9以上の作品

与えられたフレームに自分の言葉を記入する。

（ ）の中は、学生の創作。Peer editingをおこない、書き直しをして提出。（本文のまま）

作品1

I am (a bike.)

I live (in the storeroom.)

My favorite colors are (the silver which reflect in the ground and the gold of the sun.)

I wear (metal coat and ring of black rubber.)

My job is (to take people to the destination.)

My best friend is (a road.)

On vacation, (I go to the part and bask in the sun.)

My favorite holiday is (the New Year's Day.

Because I can rest and relax as people often spend in a house.)

評価：9点

作品2

与えられたフレームを自己流に変化させて詩を

完成させた例。(本文のまま)

I am going to visit you at once in a year.

My favorite color is dark.

I don't wear any clothes.

But I wear a cap with a sharp point and red when

I only work.

My job is sharing my life and sparkling with all my might.

We are burned to death by the people with a broad smile on them face.

But I feel good at that time.

評価：9点

学生の作品(旅行記) 評価9以上の作品

自分が行った旅行について書く。事前に、沖縄旅行に関するエッセイを読み、表現などを確認した。書いた作品は、peer editionをおこない、書き直したものを提出。(本文のまま)

I will write about my favorite place, Tobu Zoo Park.

I have been to Tobu Zoo Park three times.

Especially, I went there this spring.

There are three good points about Tobu Zoo Park.

First, there are a zoo, an amusement park, and a pool in Tobu Zoo Park.

There are white tigers and they are famous.

For once, I went an amusement park with my friends.

Second, what were we doing?

We rode two roller coasters. There are two roller coasters in Tobu Zoo Park.

The roller coaters' names are Regino and Kawasemi.

I had never ridden a roller coaster before, and I had thought that it was very scary.

So, I didn't want to ride them, but I was ridden them by my friends.

In fact, they were very scary.

When I was riding on them. I kept shouting, but I enjoyed them very much.

Third, Tobu Zoo Park is very pleasant. So, we want to go there again and again.

You think that we can't go to Tobu Zoo Park easily because it is in Saitama.

But, we can go there easily because it is close to a station. So, we can go there again and again!!

I wrote about Tobu Zoo Park.

By the way, I will go to a pool of Tobu Zoo Park this summer. I hope you go to Tobu Zoo Park some day.

Thank you for reading.

参考文献

- 1) 岡田靖子: 大学授業におけるプロセス・ライティングの取り組み—アンケート調査と内省文の分析を踏まえて、聖学院大学論修、第18巻、第3号、p.249-263, (2005)
- 2) 佐野正之 (編) : アクション・リサーチのすすめ, 大修館(2007).
- 3) 佐野正之 (編) : アクション・リサーチのすすめ, 大修館(2007).
- 4) D. Nunan: Second language teaching and learning: MA: Heinle & Heinle publishers (1999).
- 5) 隅田朗彦: プロセス・ライティング指導法に対する短期大学生の意識—質問紙による分析、新潟青陵大学短期大学研究報告、第40号、p.157-163. (2010).
- 6) Cowie, N.: Students of process writing need appropriate and timely feedback on their work, and in dealing with that feedback. Saitama University Review, 31(1), p. 181-194 (1995).
- 7) Ushioda, E.: Motivation and identity, Distinguished lecture series, Temple University Japan Campus, (2012).
- 8) Murphey, T.: Changing language learning beliefs: "Appreciating" mistakes. Asian Journal of English Language Teaching, 6, 77-84. (1996).

【受理年月日 2012年 9月28日】